

「憲法に限らず、法案というものは、誰が案を出したのかは重要ではありません。それを審議、議決したのが誰なのかが重要なのです。(略)／審議、議決さえすれば、それは国会が作った法律になります。憲法も同じことです。誰が案を出してきたのかは本質的なことでなく、それを審議し議決したのが日本国民である以上、日本の国民が作った憲法です。押しつけ憲法でもマッカーサーが作った憲法でもありません。制定後六〇年間、国民が憲法として受け入れてきた事実は、さらにこの憲法の正当性を根拠づけるものです。／そもそも当時、押しつけ憲法という概念はありませんでした。押しつけ憲法という言葉がはじめて出てきたのは、一九五四年の自由党の憲法調査会的时候了。そこで、明治憲法の体制を維持したかった松本烝治が感情的に押しつけられたと発言し、それが押しつけ憲法という決まり言葉として政治的に利用されてきただけのことです」(伊藤真『憲法の力』、二〇〇七年、集英社新書、一六一～一六二ページ)。

⑦ 鶴見、前掲書、一八二ページ。

れがグレイトなもんですか? (略) (一一三―一一四)。

ここでは上坂の認識不足が明らかであるが、しかし鶴見もアメリカを全面肯定するわけではない。押しつけかどうかという問題は、ここではこれ以上論じられないのでひとまず置くとして⑥、対抗原理について鶴見は、別のところでも述べている。

「鶴見 (略) これはとても難しい問題だけでも、ヨーロッパも十九世紀まではまだしも、それ以降は国家を創る時に、国家自らを内部から批判する対抗原理を作らなければいけないのに、その対抗原理がほとんどない。／カントその他にはありますよ。だけどポツンポツンとあるばかりで、決してヨーロッパの考えの主流ではない。時々それに気がついて、ケロツグ・ブリアン条約のようなものを作ろうとする運動が出てくるけども、ヨーロッパはいかにも遅れている。アメリカ合衆国はさらに遅れている」(二〇八)。

鶴見からすれば、この対抗原理の基底を自己に置くことが最大の主張である。これが一貫した「私的な根」の思想であり、戦後の改革運動から六〇年安保や七〇年安保に関わってき、いまなお続いている鶴見の確信である。因みに今から見ればやや時代的な印象を与えるが、憲法九条をめぐる現在の状況にちよと当てはまる鶴見の文章がある。

「日本で現在たたかわれているのは、実質的には敗北前に日本を支配した国家と敗北後に生まれた国家との二つの国家のたたかいである。この運動を支える思想は、国家によって保証された私生活の享受に没頭するという考え方ではなく、国家を見かえず私というとらえ方にある。ナショナルなものを見なおしという近年の日本の論壇の傾向が、明治以後つくられた日本の国家機構をもその中のみつくし消化してしまうものとしての日本社会の常民の知恵として理解されるならば、ここには、現行憲法が指さす国家批判の運動と結びつく一つの生活感情の流れ、知恵の貯蔵庫がある」⑦。

これは六〇年に書かれたものではあるが、いまなお的確な指摘をしている。

以上、鶴見と上坂の対話の検討から、鶴見の思想の特徴的な一端を考察した。ここから導き出されるのは、生活を思想の出発点とするものの、生活自体が権力との接点を持つということを自覚しているという意識であり、これが対抗原

理を絶えず意識するという鶴見の視点となっている。この点が枠としての権力を前提として発言する上坂との違いであり、両者の対立するところである。しかし鶴見の思想の柔軟さは、上坂の生活意識からの発言に一定の意義を認める。それは、日常意識に位置を占める保守的意識の存在を求めた上で運動を進めていくという鶴見の運動論に関わる。そしてこの問題は、そのまま日本社会の改革運動の姿勢と結びつく側面を持っている。ここではこれ以上論じる余裕はないが、鶴見の視点の射程を検討する際の重要な項目の一つとなる。

註

- ① 鶴見俊輔・上坂冬子『対論・異色昭和史』、二〇〇九年、PHP新書。以下本書からの引用は、ページ数のみを記す。
- ② 『鶴見俊輔集 9——方法としてのアナキズム』、一九九一年、筑摩書房、三五―五ページ。
- ③ 岩田行雄編・著『検証・憲法第九条の誕生』、二〇〇四年、自費出版、五三―五四ページ。
- ④ 同書、六八―六九ページ。
- ⑤ これに関連して言えば、ウエップマガジン『マガジン9条』のインタビュー特集で、ミュージシャンの中川敬は編集部からの質問に次のように答えている。(『マガジン9条』編集部編『みんなの9条』、二〇〇六年、集英社新書、一九四―一九五ページ)。
「編集部 9条の改定についての焦点は、自衛隊を今後どうするか、ということがありますが、中川さんはどのように考えますか？」
中川 徐々にでもいい、国際災害救助隊という形にしていくなかないな。まじで。みんないろんなことを言うけれど、もはや地球や人類の未来が危うい状況で、国家がどうの、国防がどうのとか、言っている場合じゃない。日米安保も、米軍も、日本軍もいらんよ。日本は丸腰で行くわけや。それでもし侵略されて滅びるような民族なのであれば、これは誇りある滅び方やね。やってみようやないの。丸腰の大和魂や。(略)『軍事』以外の解決法を、人類は本気で考えないとね」。
- ⑥ これは、鶴見の視点に通じる発言である。
なお「押しつけ」かどうかという問題については、次の意見が参考になる。

コールの『海の沈黙』をあげる。

「鶴見 力はある。フランス人のヴェルコールが書いた『海の沈黙』という本があるんです。ナチスがフランスを占領した時、フランスの軍隊の将校は黙って飯を出す。彼らはなかなか教養が高くて、だからドイツ軍の将校は文化的な話をしようとするけど、ずっと黙っているのついに参っちゃうんだ。日本にもそういう文化があるんです。『海の沈黙』のような文化とマナーで対抗する。これが私の九条を支える力なんです」(一一一)。

五

続いて、もし軍隊を持たないというその結果負けたらどうするのか、ということを見通した議論に移る。ここでの上坂と鶴見の対話は興味深い。

「上坂 (略) / 九条なんてたわごとだと私は思います。戦争のない時代なんてあるはずがないし、国家が国家たるためには軍隊および交戦権がなければ失格だ、と。(略) もうあんな惨めな思いはしたくないですから。哀れな負け方をするのはイヤです。私の考え方を総括すると、戦争のない時代はありえない。だから軍隊を持つべきだ。ただし一つ加えるとしたら、軍隊を持たないために負けるのはやむをえない。でも、負けるならせめて『立派な負け方』をしたい、と。」

鶴見 そう！ 負けつぷりが大切ですね。私の知るかぎり、負けつぷりの問題を表に出したのは竹内好です。(略)

上坂 負けつぷりというのは、こちらの責任でもあるけれど、ある意味で相手の責任でもありますね。立派な国に負けるならいいけど、低俗な国に負けた場合は六十年経ってもヘンに尾を引きますね。

鶴見 ガンジーとイギリスはいい関係だ。ガンジーはよく戦って、結局、イギリスが譲ったんだ。(略) ガンジーはイギリスが喰るほど見事な負けつぷりだった。イギリスはその後、次から次へと植民地を解放してくでしよう。つまり勝つた側を根底から揺るがすような負けつぷりが理想的だ。

上坂 おっしゃる通りね。アメリカの勝ちつぷりもよくないけど、日本は

負けつぷりが悪くて、いまだに敗戦当時とほぼ変わりなく、方向も戦略も失ったままの状況です」(一一五～一一六)。

ここでは両者の視点が少し歩み寄るようなところも見受けられるが、文化とマナーで対抗する鶴見の視点が一定の有効性を持つ側面が語られる。⑤ つまりここで鶴見は、負けることによる日本社会の大きな変化を期待しているのであり、ここで持ち出された竹内好の例でも、竹内が中国侵略に反対しつつ後に太平洋戦争に賛成に回ったという裏には、この戦争の敗戦によって日本の変化を期待するという意味があると指摘する。しかしそれにしても上坂の発言には、戦争責任を問題にする場合もそうであるが、保守派にありがちの被害者意識の枠が先行し、それ以上の考察を妨げていると見るのは考え過ぎであろうか。

六

さて鶴見のもう一つの重要な視点である、権力への抵抗とそれを批判する対抗原理については次の意見が述べられている。

「鶴見 すべての権力は腐敗する。これはイギリスのパブ(酒場)で交わされている言葉を集約したものです。マルクスの公式著作のどれを見ても、そういう言葉に出会ったことがない。だからマルクス主義はスターリンのような完全な権力を作るけどそれに無抵抗なんです。イギリス政治では繰り返し、負けた党派の主人公が We are minority というシーンが出てくる。だけどその後 But, We are a great minority と言っています。それが浸透していく。／憲法九条を守るという考え方がマイノリティになっても、それがグレイト・マイノリティであればいい。日本は一票差でも勝てば『勝ち』というけれど、少なくともそれはイギリス流のデモクラシーじゃない」(一一三)。

つまり憲法については、たとえ負けたとしても、そこに多数の民衆の意見が反映されているのであり、これが次の運動を動かしていく力となるという確信である。しかし上坂は、この点について単純に、こう反論する。

「上坂 でも、日本自身が戦争はこりこりだと思つて作つた九条じゃなくて、こつちが一番弱っている時に、二度と立ち上がらせないことを目的に、わずか一週間くらいで作つて押しつけられたマイノリティでしよう？そ

やかさを味わっていましたよね」(十五)。

ここにはいわゆる庶民としての正直な感覚が存在し、これについて両者はほぼ一致する。しかしよく見れば、上坂の印象は、「全体主義は嫌だけど、迷いなく一点に向かって前に進むのは快感でした」(七六)という素朴さであり、鶴見の場合には、「例えば前に話した東京大空襲で焼け出される人たちの陽気さね。本当にびっくりした。あの時は、民族の力というものを感しました」(同)という生活力の確信である。共に庶民としての感覚ではあるが、やはり何かしらのズレが感じられる。恐らくそれは、国家の権力との距離であろう。つまり上坂の場合には、国家体制の枠内での庶民として正直な印象であり、鶴見の場合には、空襲によってそれが一時的にはあれ消え去った上での印象なのである。ここに、両者が共通的感觉を持っていたとしてもその方向が異なってくる一つの要素がある。更にいえば上坂には超えがたい枠があると見える。

四

このことは、両者が問題とする憲法九条に関わる議論になるとより明確になる。「九条の会」の呼びかけ人である鶴見の主張はもちろん九条擁護で明快である。

「鶴見 なぜ九条を守らなければいけないのか。起案というのは理想主義でいいんです。生物が発生して以来、地球には闘争が絶えなかった。人間が発生して五十年、争いが続いた。それが一九四五年に十万人単位で人を殺せるようになった。日本は第五福竜丸を含めたら、原爆の被害を三度も受けた珍しい国なんです。やられた者として、はっきり理想を掲げていいんじゃないか。これがいまの私の考え方です。九条っていうのは、人間の歴史の中で一つの理想なんですよ」(一一〇)。

これは、憲法制定当時の意気込みを示す吉田茂首相の発言、「自衛権に依る交戦権の放棄ということ強調するということよりも、自衛権に依る戦争、また侵略に依る交戦権、この二つに分ける区別そのことが有害無益なりと、私は言ったつもりで居ります。今日までの戦争は、多くは自衛権の名に依って戦争を始められたということが、過去における事実であります。(中略)交戦権に二種ありとするこの区別自身が無益である。侵略戦争を絶無にするこ

とに依って、自衛権に依る交戦権というものが自然消滅すべきものである」③。あるいは金森徳次郎国務大臣の答弁、「この憲法は、そのような考えに依りまして、特に区別せず、いわば捨身になって世界の平和を叫ぶという態度を執った次第であります」④に通じるものである。

ところがこれに対して上坂は、次のように批判する。

「上坂 神学の話じゃなくて、憲法の話ですよ。憲法は現実的な規範として扱われなきゃ意味ないじゃないですか。他国は皆、軍隊を持っているのに、日本だけが『平和論者』でいいのですか？」(一一〇)。

そして九条が人間のマナーであるとする鶴見に対して、

「上坂 日本は負けた上、マナーを要求されたんじゃない。帳尻があわない。(略) マナーは強い力を持った場合にのみ成立するものです。軍隊を持たない変形の国家がどうしてマナーを主張できますか」(一一一)と反論する。

ここには保守的傾向の人々が持つ典型的な意見が見て取れる。上坂の言う「変形の国」という表現には、国家は軍隊を持つのが当然であり、それが無いというのが歪んだ欠陥国家だとする意味が込められている。当然のことながら上記の戦後直後の国会答弁に見られるように、武器を持たないことで世界に範を示すという意義の重要性を上坂は理解しない。武器を持つ国が正常であるとする保守派の立場を固守する。

鶴見は、武器を持ち、兵器を造ると必ずそれを使ってみたくなる、戦前の日本がまさにそうであったとして、これ以外のいろいろな手を打ってみるべきだとする。

「鶴見 武器はそれこそ棍棒程度でもいいでしょうし……」

上坂 手を打つなら、逆に核兵器を持つという方法もありますけど。

鶴見 沖繩空手というようなものがありますが、ああいう種類のことを考えるのいいですね。

上坂 そんなもので、国と国との戦争に勝てるはずがないじゃありませんか。(略)だいたい、戦争のない世の中なんてありえますか？(略)(一一二) (一一三)。

ここでのやり取りには、鶴見の九条擁護への思いが端的に語られており、九条を守る力として、文化とマナーを主張する。その例としてフランスのヴェル

日本のジャーナリズムについて次のような文章を記している。

「何年も前に大野力からきいた話だが、戦争で家をやかれて歩いてる時に、『こんなに戦争というものはひどいものなのだから、決して戦争をしてはいけない』と思う人は、評論家型の平和論を戦後にとなくなるようになった。しかし同じ体験をしても、『これからはそんなにたやすく燃えない家をつくらなくてはいけない』と思った人は、技術者型の考え方で戦後は何かの実務の立場について、くらしの向上をめざした。

同じ体験からひきだされたこの二つの考え方は、戦後にはたがいに結びつくことなく進んできたというのが、大野力の批判である。」^②

鶴見はこの文章で、花森の主催した『暮しの手帖』の姿勢をわが国のジャーナリズムでは見出しがたい、「戦争をひきおこす力をくらしの中からはじきかえそうとする考え方」(同)で、きわだつてるとして賛同する。

小論で取り上げる鶴見と上坂の間にも、このような同じ体験からの意見の違いと共に、それだからなおのこと、両者が接近する場面も見られる。ただし結論的なことを先に言えば、両者の違いは、見通すタイムスケールと生活への懐疑の問題であるように思われる。というのも上坂の生活実感は、戦争に対する一定の反省的視点を含んでいるとはいえず、もっぱら戦前・戦時中から戦後の素朴な保守的視点で一貫している。従ってこの視点からは、戦後の民主主義の側面は、伝統的であると上坂が考える生活実感を歪める作用を及ぼしているものであり、悪役の役割を果しているのである。これに対して鶴見のそれは、かねてからの主張であるように、明治時代にはまだ存在していた日本的な伝統生活のよさが一九〇五年の日露戦争後を転機にした日本の支配層の変化によって抑圧されたとし、敗戦によって再び日常の伝統的生活実感が戻ってきたとする。従って、そこには支配に対する絶えざる懐疑の視点が含まれ、その生活実感の復活＝民主主義の再生を象徴する日本国憲法、特に第九条については、これを徹底して擁護するべきものとする。

ただ両者とも、生活実感ということに基点を置くということで、そこからする時代の印象には共通するものがある。それはその時代時代の底流として庶民の間感じられていた雰囲気、鶴見の言葉で言えば「あたりまえの感覚」である。これに対して両者が対立する側面は、その底流から何を汲み取るかということである。すなわち鶴見が戦後民主主義の肯定から国家権力への抵抗の意義を見

出したのに対して、上坂はどのような理想主義では無力であると指摘する。これに対して鶴見の立場は、「私的な根」が鶴見の依って立つ根幹であるが故に、上坂の素朴保守的視点からする批判に対しても、政治的党派のような大上段からの反論がなされていない。しかしその抵抗の視点は時代の変化を問わず一貫していると云わなければならない。

三

まずは両者の印象が共通する側面を見てみよう。上坂は、戦時中の雰囲気について、こう発言する。

「上坂 (略) 小学校に入った夏に支那事変(日中戦争)、小学校五年生で大東亜戦争(太平洋戦争)、女学校三年生で芋掘りをしていた頃に敗戦です。つまり、私は真面目に生きていれば誰でも軍国少女にならざるをえない時代に生まれ育ちました。いえ、嫌な時代に育ったとは思いません。それどころか、私はいまでも戦争時代を思い出すと、何かしら一種の爽やかな感情を拭い切れないんですよ。迷わずまっすぐ前を向いて、お国のために『欲しがりません勝つまでは』と一生懸命に生きてきた少女時代は、私にとってどこか爽やかな思いが否定できないの」(十四)。

そして次の発言が続く。

「鶴見 (略) その爽やかさは私も感じた。東京大空襲の時、私は信州から帰京しようとして大宮の駅で降ろされてしまった。その後、何度も乗り換えて最後に渋谷に着いて、そこから麻布の自宅まで歩いたんですよ。そうしたら麻布のほうから焼け出された人たちが歩いてくるのと出くわしたのだけれど、人々がとても元気で陽気だった。いま思い出しても私は感動するね。(略) あの時、私は日本人は偉いと思ったし、日本の庶民の底力感じましたね。」

上坂 たしか梅棹忠夫さんは、戦後に大陸から引き揚げてこられたんですね。引き揚げ船の甲板に赤ん坊のおむつが翻転と翻っている情景を見て、明日の日本を信じたというようなことをお書きになっていたのを思い出します。戦争を礼賛する気はもちろんありませんけど、戦時下の私たちは瞬間風速に抗しているという快感ともいえる思いがあって、意外な爽

鶴見俊輔と戦後民主主義の視点

Shunsuke TSURUMI and Japanese Democracy

Tsuneyuki KIMURA

木村倫幸

一

太平洋戦争後の日本社会を様々な批判的視点から見届け、発言を続けてきた哲学者鶴見俊輔の思想を検討することは、ある意味では戦後日本社会の本質的側面に迫る事業となるであろう。鶴見の思想はそれくらい意義を持っていると言っても過言ではない。しかし同時にその事業は、現在においてもなお解決されるべき課題が多々残されていることの確認を含んでおり、この点について言えば、鶴見の思想に対する評価は、現在の政治過程と通底する議論となる。そしてその中心的な問題点の一つが戦後民主主義をどう見るかという問題であり、これと関連する戦争責任の問題であることは大方の確認するところであろう。

小論はここに焦点を当てることにより、その一部を浮かび上がらせることを目指している。主たる資料として取り上げるのは、鶴見と作家上坂冬子との対話、『対論・異色昭和史』^①その他である。ただし上坂が、鶴見とは対極の立場を取る発言をしてきた保守的傾向を持つ作家であったが、またその反面、生活実感からする比較的素朴な主張が数多くあり、そこに鶴見の言う日常の視点とは通じるものが存在するからである。そして同時に上坂が、方向の異なる日常の視点をも示しているからである。それ故両者の会話自体が興味深いものであるとともに、相互の立場の違いが鶴見の思想の特徴をより深く印象付けることになる。さらに上坂が、その作家としての出発点において『思想の科学』によって見出されたということがまた、これら両者の比較の焦点となる。もともと上坂がこの対話の直後に死去し、両者のこれ以上の対話の展開を見ることができないのは残念ではあるが、しかしこの時点での両者の意見の対立は、現在の日本社会の民主主義を見る目として重要な要素を含んでいると言えよう。

二

さて両者の対話は、太平洋戦争の戦時下、そして戦後の時代と続き、現時点において戦後日本をあらためて問う地点まで進む。そしてその際にまず考慮に入れておくべきことは、両者は共に日常生活者の視点、生活実感から出発しても、その行き先が異なる場合が多々あるということである。このことを鶴見は熟知しており、既にかなり古い時代に花森安治の『一棧五厘の旗』に寄せて、